紹介

スエトニウス著　国原吉之助訳
『ローマ皇帝伝』(上)・(下)

全盛期のローマ帝国に生きたスエトニウス（紀元七〇年ころ～一三〇年ころ）は、多方面にわたる著述活動を行なったようであるが、今日伝えられている作品は、『名士伝』のごく一部とこの『ローマ皇帝伝』にすぎない。そして、この『ローマ皇帝伝』こそ、ラテン語による伝記文学の模範として古代末期や中世の著作家に大きな影響を及ぼし、また現代に至るまで非常によく読み継がれてきた作品なのである。

本書の原題は『カエサルたちの伝記　八巻』であり、かのシーザー（ユリウス・カエサル）の伝記をその第一巻に収め、次いで第二巻に通例初代ローマ皇帝とされるアウグストゥスの伝記を配し、以下年代順に、第三巻ティベリウス帝、第四巻カリグラ、第五巻クラウディウス帝、第六巻ネロの各各の伝記を載せている。第七巻はネロ死（紀元六八年）後の内乱時の三皇帝を、第八巻は六九～九六年に君臨したフラウィウス朝の三皇帝を扱っている。従って、シーザーよりネロまでの六巻と残りの二巻との間には、各皇帝の取り扱いに著しい量的な差がある。

スエトニウスはローマ帝国では第二番目の支配階層である騎士身分の出身であり、また出生地も第二次世界大戦後に発見された碑文の銘の研究によって、今日では属州ヌミディア（北アフリカ）であると考えられている。しかし、彼は首都ローマ市で最高度の教育を受けたようであり、とくに法律の知識を得て法廷で活躍したらしい。そして、トラヤヌス帝とハドリアーヌス帝のもとで皇帝の書記的な職務に就いた。この職歴は彼に伝記を書くための重要な材料を提供した。皇帝のもとに保管されている様様な資料をみることが出来るようになったからである。皇帝の布告や日誌、書簡などが伝記の中にしばしば引用されているのはその結果である。

ところが、古代末期にスエトニウスの作品を模倣して書かれた史書『ヒストリア・アウグスタ』の記事によると、一二二年にスエトニウスは彼のパトロンであったと思われる近衛隊長セプティキウス・クラルスらとともにハドリアーヌス帝によってその職務から更迭されたらしい。この事件によって、スエトニウスは伝記を書くために必要な資料を自由に利用することが出来なくなってしまった。先にふれた第一～第六巻までと第七、八巻との各皇帝伝の量的相違の原因を一部ここに帰する学者も多いのである。

彼の伝記記述のあり方は、第一にそこで取り扱う人物の家柄、誕生から述べ、皇帝に即位するまでの経過が続いて語られるのが通例である。そして、即位後については、まず美徳となる点、次いで悪徳である点が各々整理して書かれ、最後に死に至るまでの過程や容姿などが語られる。

ところで、スエトニウスの史料としての価値はどうであろうか。彼の扱っている人物に関しては、最も古いシーザーとアウグストゥスについては、同時代のキケロや詩人たちの作品、そしてシーザー自身の文章、あるいはギリシア語による史書などが存する。また、ティベリウス帝より六九年内乱時に至るまで、即ちスエトニウス『ローマ皇帝伝』の第三～七巻に相当する時期につ

いても、歴史家タキトゥスの諸作品が――一部の欠損を除き――より正確な情報を与えている。従って、最後の第八巻が、今日残存する他史料の状況からみても、あるいは同時代史料となっていることからも、重要といえるのである。しかし、先述したように、この巻の記述は、量的側面のみみても充分とはいえない。

記述内容はどうか。豊富な資料を利用して書かれたと思われる巻には、数多くの引用や諸説の紹介と批判があって甚だ学問的であり、また著者自身が初めて発見した事項もみうけられて貴重に思われる。しかし、皇帝の伝記であるという構成上、帝国の全般的な制度や諸地域の様子はごく必要な限りでしかふれられず、またその記述も怪しいところがないわけではない。さらにまた、元老院議員の財産資格の記述(第二巻四一)など、他史料の与える情報との齟齬を生じさせて学界の論議を生み出す原因になっている部分も少なくない。

そしてなによりも、一人の皇帝のまず美徳を取り上げ次いで悪徳を書き並べる彼の叙述のあり方は、読む者に各ローマ皇帝たちが『ジーキル博士とハイド氏』の主人公の如くにみえ、一人の人間の中でその両面を如何に整合的に理解すればよいのか当惑させてしまうのである。例えば、かのカリグラ帝について、スエトニウスはまず、この皇帝が人々に対して寛大に振舞い、暗殺の密告書は提出されても受理せず、また前帝時代に中断していた国家統治の現状報告書を公開し、昔の民会の制度を復活させて民衆に選挙権を返そうと試みたことなどを語る。ところが、二二章からは「怪物」としてのカリグラを語る。彼は、自己を神として祀らせ、妹たち全部と近親相姦を犯し、様々な階層の人々を極めて残酷な手段で殺した。穀物倉の扉を閉めて民衆を餓えで苦しめ、誰を処刑するときも「いま自分は死につつあるのだなと感じるよう(間断なく小刻みに)突き刺せ」と命令していたと。

しかし、以上のネガティヴな側面にもかかわらず、スエトニウスは面白い。タキトゥスの『年代記』(同じ訳者で岩波文庫に所収)の面白さとはまた性格の異なる面白さがここにはある。

スエトニウスは各皇帝の誕生や死について超自然的な前兆や星占いなどを多く語り、スキャンダラスな話、卑猥な話を好んで集めている。タキトゥスの如き冷徹な批判精神はずっと後退して、全く無責任・無批判なおしゃべりが前面に出てくることが多い。学者たちによって彼が夙に「好色家」「中傷家」といわれてきた所以である。だが、制度や政治思想について充分ではなくても、ローマ人上層部の生活意識・倫理観・迷信・性生活あるいは服飾などについては実に良い情報源である。「社会史」が定着している今日、訳者も解題で紹介しているように、スエトニウスを「社会史」的記述の先駆とみなそうとする学者たちが出てくるのも当然であろう。ローマ史に関してこうした興味を持つ者にとって、訳者の言葉を借りれば、スエトニウスはまさに「うっとりとするがらくたの宝庫」になっているのである。そしてまた、地中海世界を統治したかのローマ皇帝たちの幾人かが、頭髪の薄さで悩み、持病に苦しんでいたのを読む時、国制・政治的事件や宗教関係の叙述では理解できない皇帝の人間味に接することも出来よう。

『ローマ皇帝伝』の邦訳はごく一部について以前にも存したが、このたび完訳され、入手しやすい岩波文庫に収められたことは

まことに慶ばしい。訳は時に思いきった意訳がなされているところもあるようであるが、読者に読みやすくと配慮し、またアウグストゥスの伝記の参考資料として『神君アウグストゥスの業績録』をあわせて訳出・添付された訳者国原氏の労を多としたい。巻末の訳者による解題は研究者にとっても有益である。この紹介文もそのレジュメの域をあまり出ていない。

本書を読む者は、同じ時代のギリシア人プルタークの有名な『英雄伝』とは一味違った「ローマ人」の伝記作品の心髄にふれることが出来るであろう。

（文庫版(上)　三三九頁　一九八六年八月
五五〇円　(下)　四二三頁　一九八六年九
月　六〇〇円　岩波書店）
（南川高志　京都大学文学部助手）

受贈図書

（一九八六年五月二三日～八月一二日）

神道学（出雲大社神道学会）　一二九
一橋研究（一橋大学大学院）　一〇―四
鳴門教育大学研究紀要　一
社会学年誌（早稲田大学社会学会）　二七
韓国史研究彙報（国史編纂委員会）　五二
五三
八幡大学論集（八幡大学法経学会）　三六
―四、三七―一・二合併号
富士論叢（富士短期大学学術研究会）　三
一―一
奈良国立文化財研究所年報
日本思想史研究（東北大学日本思想史学研究室）　一八
史友（青山学院大学史学会）　一八
人文科学論集（鹿児島大学文学部）　二〇
白山史学（東洋大学白山史学会）　二二
東洋大学文学部紀要　三九
Ritsumeikan Law Review（立命館大学）
一
皇学館史学（皇学館大学史学会）　一
皇学館大学紀要　二四
COSMICA（京都外国語大学）　一五
龍野市史（龍野市総務課市史編纂係）　七
東洋文化（東京大学東洋文化研究所）　六
六
民族研究（北京民族研究所）　二、三
学術研究（早稲田大学教育学部）　三四
横須賀市博物館研究報告（横須賀人文博物館）　二九
経済論究（九州大学大学院経済学会）　六
四、六五
海南史学（高知大学高知海南史学会）　二
四
鹿児島経大論集（鹿児島経大経済学部学会）
二七―二
人文研究（神戸女子薬科大学）　一三
文明（東海大学文明研究所）　四七
三浦古文化（京浜急行電鉄三浦古文化研究会）　三九
神道学（神道学会）　一三〇
史料館所蔵史料目録（国文学研究史料館）
四三、四四
札幌大学教養学部紀要　二八
京都部落史研究紀要　六
社会科学論叢（長崎大学教育学部）　三五
立命館産業社会論集　二二―一
史学年報（神戸大学史学研究会）　一